

新人へ贈る「青春」の詩^{うた}

星 清*



今年もまた、新学期・新年度の季節がめぐってきた。新入生、新規採用者は皆いい顔をしている。人生で一番いい季節かもしれない。29年前、始めて社会に出た日の緊張感は、いまでも鮮明に覚えている。

「新」という漢字は、語源的には木の切り口の生々しさを表わすと言う。切ったばかりの木の切り口は、樹液にぬれて、香気を放っている。そう言われてみれば、子供の頃の記憶がよみがえってきた。冬の遊びとして、カエデの木に斜めに傷を付けて、甘いシロップをよく吸ったものだ。

戦後半世紀を経過して、組織電池の寿命が終りに近づいていないだろうか。この間、社会経済システム、国民のニーズ、価値観などが大きく変革をとげ、従前の思想・思考体系が通用しなくなってきていることは確かである。

人間に限らず、すべての物事や現象は、新陳代謝から言っても昨日と同じものではなく、「日に新なり」というのが生命の常態である。すなわち、政治・行政の組織も、ある時期点検して「日に新た」にせねば、部分的に衰死し、その死が全体に及ぶことになりかねない。「また日に新なり」とするのが行政改革の真の意義でなだろうか。

次の言葉が書かれた額ぶちが、この数年間、私のオフィスの壁に掛けられている。

サムエル・ウルマン

人は信念と共に若く、疑惑と共に老ゆる。

人は自信と共に若く、恐怖と共に老ゆる。

希望ある限り若く、失望と共に老い朽ちる。

人間は歳を重ねるにつれて、感動が少なくなると言われている。しかし、10余年前、上記の言葉に初めて接した時は、かなりのショックを受けたことを覚えている。

サムエル・ウルマンの「青春」の詩は、年頭所感、結

婚披露宴での祝辞、入社式における経営者の訓辞など、いろんな折りに引用されているようである。

サムエル・ウルマンがいかなる人物なのか、その全容が明らかになったのは10年程前であり、下記の参考文献に詳しく述べられているので参照されたい。

サムエル・ウルマンは1840年ドイツに生まれる。1851年両親と共にアメリカに移住する。1884年、アラバマ州バーミングハムに移る。1920年、80歳の誕生日にあたり、家族がウルマンの詩集「80年の歳月の頂から」を出版、この中に「青春」の詩が納められている。1924年、バーミングハムにおいて死す。84歳。

ここで注目すべきことは、「人は信念と共に若く、疑惑と共に老ゆる」で始まる一節が、サムエル・ウルマンによる「80年の歳月の頂から」の巻頭をかざっている英語のオリジナルの詩の中にはない点である。誰が、いつ、何故、この節を加筆したか現時点では分かっていない。しかし、この一節は日本語でも英語でもゴロがよく、口の端にのりやすい。

もう一つ「青春」の詩に関して興味ある話がある。戦後、連合軍の最高司令官として我が国に駐留したダグラス・マッカーサー元師が、1942年ジョン・ルイスからこの詩を贈られたとき以来、彼はこれを愛唱し、座右の銘とし、しかも彼の演説の中で何度か「青春」の詩を引用したとのことである。マッカーサー将軍が愛唱した詩の中には、上記の「人は信念と共に若く、疑惑と共に老ゆる」で始まる一節が含まれている。

以下に、新しい入局者へのメッセージとして、もっとも流布している「青春」の詩の全文を贈る。

参考文献

宇野 収・作山宗久：「青春」という名の詩一幻の詩人サムエル・ウルマン、産業能率大学出版部、1986。

*開発土木研究所長

青春

サムエル・ウルマン

青春とは人生のある期間ではなく、心の持ちかたを言う。薔薇の面差し、紅の唇、しなやかな肢体ではなく、たくましい意志、ゆたかな想像力、炎える情熱をさす。青春とは人生の深い泉の清新さをいう。

青春とは怯懦を退ける勇氣、安易を振り捨てる冒険心を意味する。ときには、20歳の青年よりも60歳の人に青春がある。年を重ねただけで人は老いない。理想を失うとき初めて老いる。

歳月は皮膚にしわを増すが、熱情を失えば心はしぼむ。苦悩・恐怖・失望により気力は地に這い、精神は塵に帰する。

60歳であろうと16歳であろうと人の胸には、驚異に魅かれる心、おさな児のような未知への探求心、人生への興味の歓喜がある。

人は信念とともに若く、疑惑とともに老ゆる。

人は自信とともに若く、恐怖とともに老ゆる。

希望ある限り若く、失望とともに老い朽ちる。

人から神から美・希望・喜悅・勇氣・力の靈感を受ける限り君は若い。

靈感が絶え、精神が皮肉の雪におおわれ、悲歎の氷にとざされるとき、20歳であろうと人は老いる。頭を高く上げ希望の波をとらえる限り、80歳であろうと人は青春にして死ぬる。

YOUTH

Samuel Ullman

Youth is not a time of life; it is a state of mind; it is not a matter of rosy cheeks, red lips and supple knees; it is a matter of the will, a quality of the imagination, a vigor of the emotions; it is the freshness of the deep springs of life.

Youth means a predominance of courage over timidity, of the appetite for adventure over the love of ease. This often exists in a man of sixty more than a boy of twenty. Nobody grows old by merely living a number of years. We grow old by deserting our ideals.

Years may wrinkle the skin, but to give up enthusiasm wrinkles the soul. Worry, fear, self-distrust bows the heart and turns the spirit back to dust.

Whether sixty or sixteen, there is in every human being's heart the lure of wonder, the unfailing child-like appetite of what's next, and the joy of the game of living.

You are as young as your faith, as old as your doubt; as young as your self-confidence, as old as your fear, as young as your hope, as old as your despair.

So long as your heart receives messages of beauty, hope, cheer, courage and power from men and from the Infinite, so long you are young.

When the aeries are down, and your spirit is covered with snows of cynicism and the ice of pessimism, then you are grown old, even at twenty, but as long as your aeries are up, to catch the waves of optimism, there is hope you may die young at eighty.